

『論語集注』 訳注（子罕第九 （一））

Annotations and Translations of "Lunyu Jizhu" (9) (Part 1)

孫 路 易

SUN Luyi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第60号 2025年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.60 2025

『論語集注』 訳注（子罕第九（一））

孫 路 易

凡三十章。

全部で三十章。

第一章

子罕言利與命與仁。

〔「利」とは、ここでは、ただ貨財を求めることだけを「利」とするのではなく、「私」をもつて「公」を滅ぼし、自分の利益になるようにすることなど、凡そ「天理」（つまり事物の性質）を損なうことはすべて「利」とされている。朱子にあつては、「利」とは、人情の欲する所「だから、聖人でも「利」を不要なものとはしておらず、ただこの「利」は、「利は義の和」「義を以て利と為す」としての「利」であり、事を行う際にはただ様々な事物のそれぞれの性質に従って行つていけば、事物がそれぞれその性質に適した存在状態で存在することを得て、互いに侵したり僭越したりすることがないから、「利」が自ずとその中にあるのだ、と考えられている。「命」は、吉凶、禍福、貴賤、得喪、寿夭、窮通（つまり、ちょうど良い存在状態で存在することを得ているのが「通」、「通」でなければすなわち「窮」、ということ）は皆「命」とされるが、「命」は「理」で言うものもあれば、「氣」で言うものもあり、天の人に賦与するものは「理」で、人の寿夭、窮通の所以のものは「氣」である。「命の理」は、人間において言えば、

つまり生まれながらにして備わる「仁義礼智の性」のことである。「仁」は、天地の万物を生ずる「心」（「徳」）であるが、人間が得てそれによって生きられるものである。人間においては、「仁」（義礼智がそれに含まれる）は「心」の「徳」（「性」）であり、「愛」（惻隱の「情」）の「理」（「性」）である。「仁の道」は、ただ「公」に過ぎない。「公」は「仁」の方法であり、人が悉く「私意」（つまり私意・憶測）を除去して「私意」の隔たりがなければ「公正」（「公」、つまり「事物の性質に従つて言動すること」）である。）

孔子は、利と命と仁、それらのことについて多く語るのを避けられていた。

〔「仁」について多く語ると、人が「仁」を軽視して「力行」（つまり身をもつて努めて実行すること）を知らない。しかし、言わなければ、人が「利」とは何か、「命」とは何か、「仁」とは何かを理解することができないから、言わざるを得ないのだ。だが、「利」を多く語らないけど、言うことは「利」でないものはないし、「命」を多く語らないけど、言うことは「命」でないものはないし、「仁」を多く語らないけど、言うことは「仁」でないものはないのである。〕

集注

罕、少也。程子曰、計利則害義、命之理微、仁之道大、皆夫子所罕言也。

訳

「罕」は、「少」(つまり、「稀」のことであるが、ここでは、「罕言」とは、多く語るのを避けること)⁽¹⁾である。程子(程頤)⁽²⁾が言った。「利を計れば則ち義を害し」(つまり、「利」とは、ただ貨財を求めることだけを「利」とするのではなく、「私」をもって「公」を減らし、自分の利益になるようにすることなど、凡そ「天理」(つまり事物の性質)を損なうことはすべて「利」とされている、ということ)⁽³⁾の「利」を計れば「義」(「天理の宜しき所」、つまり、事を行う際にはただ「天理」(つまり事物の性質)に従って行っていて、「人欲」(つまり私意・憶測)の歪みがない、ということ)⁽⁴⁾を損い、(朱子にあっては、「利」とは、人情の欲する所)だから、聖人でも「利」を不要なものとはしておらず、ただその「利」は、「利は義の和」「義を以て利と為す」としての「利」であり、事を行う際にはただ様々な事物のそれぞれの性質に従って行っていけば、事物がそれぞれのその性質に適した存在状態で存在することを得て、互いに侵したり憎越したりすることがないから、「利」が自ずとそこにあるのである。これについて、「例えば「易」にいう「大川を渉るに利ろし」は、これは船を利用することに「利」(つまり川を渡ることができること)がある、ということである。」というような実例も挙げている。⁽⁵⁾「命の理は微にして」(「命の理」(ここでは、つまり、吉凶禍福、貴賤、得喪、寿夭、窮通は皆「命」とされるが、「命はただ「窮通」(「處得恰好處便是通」(ちょうど良い居場所に居られる、これがすなわち「通」、つまり、ちょうど良い存在状態で存在しているのが「通」、「通」でなければすなわち「窮」、ということ)の命。」とする。「命」はただ一つの「命」に過ぎないが、「理」で言うものがあれば、「氣」で言うものもある。天の人に賦与するものは「理」であり、人の寿夭、窮通の所以となるものは「氣」である。「命の理」とは、人間において言えば、つまり生まれながらにして備わる「仁義礼智の性」のこと)⁽⁶⁾は「微」(「理精微而難言」(理は精微であって説明しにくい)、つまり、精微)であり、(もし専ら「命」に委ねると、人間が事を行うことをやめてしまうから、それ故に、孔子は「命」

について多く語るのを避けられていたのである。」「仁の道大なり。」「(仁」とは、天地の万物を生ずる「心」(「徳」)であって、人間が得てそれによって生きられるものである。人間においては、「仁」(義礼智がそれに含まれる)は「心」の「徳」(「性」)であり、「愛」(つまり惻隱の「情」)の「理」(つまり「性」「則」)である。「仁の道」とは、「仁」は「理」で、人は「物」で、「仁」は人が人となる所以の「理」であって、「仁」の「理」が人の身体に内在して離れない状態においてそれが「道」と称される、ということである。「仁の道」は、ただ「公」に過ぎない。「公」は「仁」の方法であり、人が悉く「私意」(つまり私意・憶測)を除去して「私意」の隔たりがなければ公正(「公」、つまり事物の性質に従って言動すること)である。それ故に、「仁の道」は「大」(「廣大」の意であるが、「公是簡廣大無私意」、つまり、「公」とは、廣大であって「私意」(つまり私意・憶測)がないということ)である。それらのことは皆、孔子が多く語るのを避けられていたのである。」

注・

(1)『朱子語類』論語十八・子罕言利章「罕言者、不是不言、又不可多言、特罕言之耳。」又「子罕言利、與命、與仁。」非不言、罕言之爾。」

(2)『程氏經說』卷七「論語說」子罕「子罕言利與命與仁。計利則害義、命之理微、仁之道大、皆所罕言也。」

(3)『論語集注』雍也「子謂子夏曰、女為君子儒、無為小人儒。」朱子注「謝氏曰、君子小人之分、義與利之閒而已。然所謂利者、豈必殖貨財之謂。以私滅公、適己自便、凡可以害天理者皆利也。」『論語集注』里仁「子曰、君子喻於義、小人喻於利。」朱子注「喻、猶曉也。義者、天理之所宜。利者、人情之所欲。」『朱子語類』論語十八・子罕言利章「利、誰不要。才專說、便一向向利上去。」また「問「子罕言利」。曰「利最難言。利不是不好。但聖人方要言、恐人一向去趨利。方不言、不應是教人去就害、故但罕言之耳。」また「利亦不是不好底物事、才專

說利、便廢義。」

- (4) 「義者、天理之所宜。」(本章の注)(3)『論語集注』學而「信近於義、言可復也。」朱子注「義者、事之宜也。」『論語集注』子路「上好義、則民莫敢不服。」朱子注「好義、則事合宜。」『孟子集注』梁惠王章句上「王何必曰利。亦有仁義而已矣。」朱子注「仁者、心之德、愛之理。義者、心之制、事之宜也。」『孟子集注』離婁章句上「義、人之正路也。」朱子注「義者、宜也、乃天理之當行、無人欲之邪曲、故曰正路。」

- (5) 『朱子語類』易四·乾上「利者義之和。」義是箇有界分斷制底物事、疑於不和。然使物各得其分、不相侵越、乃所以為和也。『朱子語類』論語十八·子罕言利章「罕言利者、蓋凡做事只循這道理做去、利自在其中矣。如「利涉大川」、「利用行師」、聖人豈不言利。但所以罕言者、正恐人求之則害義矣。」また「問「子罕言利」、孔子自不曾說及利、豈但罕言而已。」曰「大易一書所言多矣。利、只是這箇利。若只管說與人、未必曉得「以義為利」之意、却一向只管營營貪得計較。」『朱子語類』易一·綱領上之上·卜筮「易本為卜筮設。如曰「利涉大川」、是利於行舟也。「利有攸往」、是利於啟行也。」

- (6) 『朱子語類』論語十八·子罕言利章「罕言命者、凡吉凶禍福皆是命。若儘言命、恐人皆委之於命、而人事廢矣、所以罕言。」また「命只是一箇命、有以理言者、有以氣言者。天之所以賦與人者、是理也。人之所以壽夭窮通者、是氣也。理精微而難言、氣數又不可盡委之而至於廢人事、故聖人罕言之也。」また「問、子所罕言之命、恐只是指夫人之窮通者言之。今范陽尹氏皆以「盡性」、「知性」為言、不求之過否。曰、命、只是窮通之命。」「朱子語類」易十一·上繫下·右第十一章「問、易中多言「變通」、「通」字之意如何。曰、處得恰好處便是通。問、「往來不窮謂之通」、如何。曰、處得好、便不窮。通便不窮、不通便窮。問、「推而行之謂之通」、如何。曰、「推而行之」、便就這上行將去。且如「亢龍有悔」、是不通了。處得來無悔、便是通。變是就時、就事上說、通

是就上面處得行處說、故曰「通其變」。只要常教流通不窮。問、如「貧賤、富貴、夷狄、患難」、這是變。「行乎富貴、行乎貧賤、行乎夷狄、行乎患難」、至於「無人而不自得」、便是通否。曰、然。」『朱子語類』論語十八·子罕言利章「命有二、「天命」之「命」固難說。只貴賤得喪委之於命、亦不可。」

- (7) 『中庸章句』第二十章「故為政在人、取人以身、脩身以道、脩道以仁。」朱子注「仁者、天地生物之心、而人得以生者、所謂元者善之長也。言人君為政在於得人、而取人之則又在脩身。」『周易本義』文言傳「元者、善之長也。亨者、嘉之會也。利者、義之和也。貞者、事之幹也。」朱子注「元者、生物之始、天地之德莫先於此、故於時為春、於人則為仁、而衆善之長也。」『論語集注』學而「君子務本、本立而道生。孝弟也者、其為仁之本與。」朱子注「仁者、愛之理、心之德也。」『論語集注』雍也「回也、其心三月不違仁。」朱子注「仁者、心之德。心不違仁者、無私欲而有其德也。」『論語集注』述而「依於仁。」若聖與仁、則吾豈敢。」朱子注「依者、不違之謂。仁、則私欲盡去而心德之全也。」「仁、則心德之全而人道之備也。」『論語集注』泰伯「仁以為己任、不亦重乎。」朱子注「仁者、人心之全德、而必欲以身體而力行之、可謂重矣。」『孟子集注』公孫丑章句上「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。」「如恥之、莫如為仁。」朱子注「惻隱、羞惡、辭讓、是非、情也。仁、義、禮、智、性也。心、統性情者也。端、緒也。因其情之發、而性之本然可得而見、猶有物在中而緒見於外也。」「不言智、禮、義者、仁該全體。能為仁、則三者在其中矣。」『孟子集注』盡心章句下「孟子曰、仁也者、人也。合而言之、道也。」朱子注「仁者、人之所以為人之理也。然仁、理也。人、物也。以仁之理、合於人之身而言之、乃所謂道者也。」『朱子語類』程子之書一「問、「仁之道、只消道一「公」字。公是仁之理、公而以人體之、故曰仁。」竊謂仁是本有之理、公是克己功夫到處。

公、所以能仁。所謂「公而以人體之」者、若曰己私既盡、只就人身上看、便是仁。體、猶骨也、如「體物不可遺」之「體」、「貞者事之幹」之類、非「體認」之「體」也。曰、公是仁之方法、人是仁之材料。有此人、方有此仁。蓋有形氣、便具此生理。若無私意間隔、則人身上全體皆是仁。如無此形質、則生意都不湊泊他。所謂「體」者、便作「體認」之「體」、亦不妨。體認者、是將此身去裏面體察、如中庸「體群臣」之「體」也。『朱子語類』論語八・里仁篇上・惟仁者能好人能惡人章「居父問、仁者動靜皆合正理、必有定則、凡可好可惡者皆湊在這則子上、所以「能好人、能惡人」。曰、然。程子所以說「得其公正是也」。惟公然後能正、公是箇廣大無私意、正是箇無所偏主處。』『朱子語類』孟子九・告子上・性無善無不善章「天生蒸民、有物有則。」蓋視有當視之則、聽有當聽之則、如是而視、如是而聽、便是。不如是而視、不如是而聽、便不是。謂如「視遠惟明、聽德惟聰」。能視遠謂之明、所視不遠、不謂之明。能聽德謂之聰、所聽非德、不謂之聰。視聽是物、聰明是則。推至於口之於味、鼻之於臭、莫不各有當然之則所謂窮理者、窮此而已。』『朱子語類』論語十八・子罕言利章「仁之理至大、數言之、不惟使人躍等、亦使人有玩之之心。蓋舉口便說仁、人便自不把當事了。」また、「罕言仁者、恐人輕易看了、不知切己上做工夫。然聖人若不言、則人又理會不得如何是利、如何是命、如何是仁、故不可不言。但雖不言利、而所言者無非利。雖不言命、而所言者無非命。雖不言仁、而所言者無非仁。」また、「問、子罕言仁、論語何以說仁亦多。曰、聖人也不容易說與人、只說與幾箇向上底。」また、「仁在學者力行。」また、「仁、學者所求、非不說、但不常常把來口裏說。」また、「只管說仁之弊、於近世胡氏父子見之。踢著脚指頭便是仁、少間都使人不去窮其理是如何、只是口裏說箇「仁」字、便有此等病出來。」

第二章

達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名。子聞之、謂門弟子曰、吾何執。執御乎、執射乎。吾執御矣。

(朱子にあっては、「博学」とは、具体的な内容として「詩書」(孔子が編纂したもの)とされている詩経や書経)や「六芸」(「礼」(吉・凶・軍・賓・嘉の五礼の礼儀作法)、「楽」(音楽)、「射」(弓術)、「御」(馬車を操る術)、「書」(文字学)、「数」(算術)の文)、「論語」、孟子、大学、中庸、史、諸子百家」が挙げられているが、実は、「天地万物の理、修己治人の方法」を尽く窮めることであり、即ち「致知」「格物」のことである。本章にいう「博学」とは、広く「六芸」をすべて学んでいた、ということである。)

達巷という「党」(行政区域の一つで、五百世帯が「党」とされる)の人が言った。「博学の方だね、孔子は。広く学ばれて「六芸」の中の「一芸」をもって)名声を得られることはなかった。」孔子はそれを聞かれて、弟子たちに言われた。「私は何か一つの技芸をしよう。」「御」をしようか、「射」をしようか。私は「御」をしよう(つまり、馬車操縦の仕事をする者になろう、ということ)。」

集注

達巷、黨名。其人姓名不傳。博學無所成名、蓋美其學之博而惜其不成一藝之名也。

執、專執也。射御皆一藝、而御為人僕、所執尤卑。言欲使我何所執以成名乎。然則吾將執御矣。聞人譽己、承之以謙也。○尹氏曰「聖人道全而德備、不可以偏長目之也。達巷黨人見孔子之大、意其所學者博、而惜其不以一善得名於世、蓋慕聖人而不知者也。故孔子曰、欲使我何所執而得為名乎、然則吾將執御矣。」

訳

「達巷」は、「党」（五世帯が「隣」、二十五世帯が「里」、一万二千五百世帯が「郷」、五百世帯が「党」、「党」は古代の行政区域の一つである。「闕党は、党の名である。」というように、「達巷」は「党」の名称である。（大哉孔子、博學而無所成名。（大なるかな孔子、博く学びて名を成す所無し。）と言ったその人の姓名は伝わっていない。「博く学びて名を成す所無し」は、思うに、その「学の博き」（つまり「博学」ということ。「学」は、ただ「效」（つまり模倣すること）に過ぎない。「知」（知ること）と「行」（行うこと）において言えば、「学」はあくまでも「知」に属し、「理」を講究すること、書を読んでその書を理解すること、人に尋ねて知らないことを知ること、皆「学」である。朱子にあつては、「博学」とは、具体的な内容として「詩書」（孔子が編纂したものとされている詩経や書経や「六芸」（「礼」（吉・凶・軍・賓・嘉の五礼の礼儀作法）、「楽」（音楽）、「射」（弓術）、「御」（馬車を操る術）、「書」（文字学）、「数」（算術）の文）、「論語、孟子、大学、中庸、史、諸子百家」が挙げられているが、実は、「天地万物の理、修己治人の方法」を尽く窮めることであり、即ち「致知」「格物」のことである。この章にいう「博学」とは、広く「六芸」をすべて学んでいた、ということ）を褒めて、「一芸」（ここでは、つまり、「六芸」の中の一つ）について名声を得ることがなかったのを惜しんだのである。

「執」は、「專執」「執」は、「守」の意であり、「執礼」は、礼を「執守」することであり、即ち礼を執り行うことである。「專執」は、ここでは、つまり、一つの技芸を執ること）である。「射」（弓術）と「御」（馬車を操る術）はどれも「六芸」の中の一つであるが、「御」は「人僕」（「僕」は、ここでは、つまり、馬車を操縦する人のことである。「人僕」はつまり、人のために馬車操縦の仕事をする人）であるから、その仕事が最も卑しいものである。その意味は、私に何か一つの技芸をやらせて名声を得させようとしたいの

か、ということである。そうであれば、私は「御を執る」（つまり、馬車操縦の仕事をする者になろう）。人が自分のことを褒めるのを聞かれて、謙虚な言葉で答えられたものである。（だいたい聖人の「謙辞」（つまり謙虚な言葉）は、原因がなくて発せられるものはなかったのである。）○尹氏（詳しくは本章の注（10））が言った。「聖人は道全くして徳備はり」（つまり、孔子は「忠恕」でないところがなくて心に備わっている仁の徳が完全である、ということ。聖人の道は、日常生活に現れるもので、「精粗小大、千條萬目」（つまり、「精」と「粗」または「小」と「大」の様々なものがあつて、その条目（仁、忠、慈、孝、信、等々）は無数）であるが、それらは皆「忠恕」に余すことなく尽きる（竭盡而無餘（竭尽して余す無し））ものである。「忠」は「体」で、「恕」は「用」である。「忠」とは、己を尽くすことであり、「恕」とは、己を推すことであるが、己を尽くすことは、「私意無所容而心徳全矣」（私意の容（い）る所無くして心の徳全し）、つまり、私意・憶測の隔たりがなくて仁の徳が欠けたところないようすることであり、己を推すことは、「萬物各得其所」（万物各々其の所を得る）、つまり、万物はそれぞれがその様々な性質に應じての存在状態で存在することができるようになることである（詳しくは、拙著『朱子哲学の研究』（岡山大学出版会、二〇一五年）第三章「朱子の「心」と第四章「朱子の「理」」。また、「施諸己而不願、亦勿施於人（諸を己に施して願わざれば、亦た人に施すこと勿れ）」（つまり、自分の心で他人の心を測って、これまで異なるところはなかったのであれば、自分に対してしてはしくないことは、また人に対してもしてはいけない、ということ）は、「忠恕」のことである。）、「偏長」（「何か一つ特別の長所」の意であるが、ここでは、つまり、偏った一つの最も得意の技芸のこと）をもって聖人のことを推し考えてはいけないのである。達巷党の人が孔子の「大」（ここでは、つまり博学のこと）を見て、その学の広いことを思つて、その「一善」（ここでは、つまり、一つの最も得意な技芸のこと）をもって世において名声を得ることがなかったのを惜しんだのだ

から、そもそも、孔子のことを慕っているものの、孔子のことを知らないであろう。それ故に、孔子は「私に何か一つの技芸をやらせて名声を得させようとしたのか、そうであれば、私は馬車操縦の仕事をする者になるう。」とおっしゃったのである。」(『論語精義』に記録されている尹焞の語では、「御藝之下者。」つまり、「六芸」(六つの技芸)の六種の仕事の中では最も卑しいものだ。)という説明が文末に加えられている。¹⁰⁾

注…

(1)『論語注疏』子罕「達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名。」何晏注「鄭曰、達巷者、黨名也。五百家為黨、此黨之人、美孔子博學道藝、不成一名而已。」「論語集注」雍也「子曰、母。以與爾鄰里鄉黨乎。」朱子注「五家為鄰、二十五家為里、萬二千五百家為鄉、五百家為黨。」「論語集注」憲問「闕黨童子將命。」朱子注「闕黨、黨名。」

(2)『朱子語類』論語三・學而篇中・弟子入則孝章「文是詩書六藝之文。詩書是大概詩書、六藝是禮樂射御書數。古人小學便有此等、今皆無之、所以難。」「禮記」內則「十有三年學樂、誦「詩」、舞「勺」、成童舞「象」、學射御。二十而冠、始學禮、可以衣裘帛、舞「大夏」、惇行孝弟、博學不教、內而不出。」「朱子語類」論語十六・述而篇・述而不作章「徐兄問、「述而不作」、是制作之「作」乎。曰、是。孔子未嘗作一事、如刪詩、定書、皆是因詩書而刪定。」「朱子語類」論語五・為政篇上・道之以政章「故齊一之以禮。禮是五禮、所謂吉、凶、軍、賓、嘉、須令一齊如此。」「朱子語類」論語十六・述而篇・志於道章「叔器因言、禮樂射御書數、自秦漢以來皆廢了。曰、射、如今秀才自是不曉。御、是而今無車。書、古人皆理會得、如偏旁義理皆曉、這也是一事。數、是算數、而今人皆不理會。六者皆實用、無一可缺。而今人是從頭到尾、皆無用。」「周礼」地官・司徒・保氏「乃教之六藝、一曰五禮、二曰六樂、三曰五射、四曰五馭、五曰六書、六曰九數」鄭玄注「六樂謂、

(3)

雲門、咸池、大韶、大夏、大濩、大武。」「五射、白矢、參連、剡注、襄尺、井儀也。五馭、鳴和鸞、逐水曲、過君表、舞交衢、逐禽左。六書、象形、會意、轉注、處事、假借、諧聲也。九數、方田、粟米、差分、少廣、商功、均輸、方程、贏不足、旁要。今有重差、夕桀、句股也。」「說文解字」序「周禮、八歲入小學、保氏教國子、先以六書。一曰指事。指事者、視而可識、察而見意、上、下、是也。二曰象形。象形者、畫成其物、隨體詰詘、日、月、是也。三曰形聲。形聲者、以事為名、取譬相成、江、河、是也。四曰會意。會意者、比類合誼、以見指撝、武、信、是也。五曰轉注。轉注者、建類一首、同意相受、考、老、是也。六曰假借。假借者、本無其事、依聲託事、令、長、是也。」「朱子語類」論語六・為政篇下・學而不思章「問、論語言「學」字多不同、「學而不思則罔」、此「學」字似主於行而言、「博學於文」、此「學」字似主於知而言。曰、「學而不思則罔」、此「學」也不是行。問、「學」字義如何。曰、學只是效、未能如此、便去效做。問、恐行意較多否。曰、只是未能如此、便去學做。如未識得這一箇理、便去講究、要識得、也是學。未識得這一箇書、便去讀、也是學。未曉得這一件事、去問人如何做、便也是學。問人、便是依這本子做去。不問人、便不依本子、只鶴突杜撰做去。學是身去做、思只是默坐來思。」「論語注疏」雍也「子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫。」朱子注「君子學欲其博、故於文無不考。守欲其要、故其動必以禮。如此、則可以不背於道矣。」「論語注疏」學而「行有餘力、則以學文。」朱子注「文、謂詩書六藝之文。」「朱子語類」論語三・學而篇中・弟子入則孝章「文是詩書六藝之文。詩書是大概詩書、六藝是禮樂射御書數。古人小學便有此等、今皆無之、所以難。」「朱子語類」學五・讀書法下「孟子曰「博學而詳說之、將以反說約也。」故必先觀論孟大學中庸、以考聖賢之意。讀史、以考存亡治亂之畧跡。讀諸子百家、以見其駁雜之病。其節目自有次序、不可踰越。」「孟子集注」離婁章句下「孟子曰、博

學而詳說之、將以反說約也。」朱子注「言所以博學於文、而詳說其理者、非欲以誇多而鬥靡也。欲其融會貫通、有以反而說到至約之地耳。」『朱子語類』學二·總論為學之方「博學、謂天地萬物之理、修己治人之方、皆所當學。然亦各有次序、當以其大而急者為先、不可雜而無統也。」『朱子語類』中庸三·第二十七章「又云、聖賢所謂博學、無所不學也。自吾身所謂大經、大本、以至天下之事物、甚而一字半字之義、莫不在所當窮、而未始有不消理會者。雖曰不能盡究、然亦只得隨吾聰明力量理會將去、久久須有所至、豈不勝全不理會者乎。若截然不理會者、雖物過乎前、不識其名、彼亦不管、豈窮理之學哉。」『朱子語類』論語十五·雍也·君子博學於文章「或問、博學於文、約之以禮、亦可以弗畔。曰、博學是致知、約禮則非徒知而已、乃是踐履之實。」

(4)

『論語注疏』子罕「子聞之、謂門弟子曰、吾何執。執御乎、執射乎。吾執御矣。」何晏注「鄭曰、聞人美之、承之以謙。吾執御、欲名六藝之卑也。」邢昺疏「子聞之、謂門弟子曰、吾何執。執御乎、執射乎。吾執御矣」者、孔子聞人美之、承之以謙、故告謂門弟子曰「我於六藝之中、何所執守乎。但能執御乎、執射乎。」乎者、疑而未定之辭。又復謙指云「吾執御矣。」以為人僕御、是六藝之卑者、孔子欲名六藝之卑、故云「吾執御矣。」謙之甚矣。」

(5)

『論語集注』述而「子所雅言、詩、書、執禮、皆雅言也。」朱子注「執守也。……禮獨言執者、以人所執守而言、非徒誦說而已也。」『禮記正義』王制「凡執技論力、適四方、裸股肱、決射御。凡執技以事上者、祝史、射御、醫卜及百工。」鄭玄注「謂擯衣出其臂脛、使之射御、決勝負、見勇力。」孔穎達疏「執技之事、凡有三條。上條論課試武夫技藝之事、中條論執技之人并射御之外祝史醫卜之等、下條論執技之人不得更為二事、以其賤、故出鄉不與士齒。凡執技論力、適四方、羸股肱、決射御者、言此既無道藝、惟論力以事上、故適往四方境界之外、則使之擯露臂脛、角材力、決射御勝負、見勇武。」

(6)

『詩經集傳』小雅·鹿鳴之什·出車「召彼僕夫、謂之載矣。」朱子注「僕夫、御夫也。」『詩經集傳』小雅·祈父之什·正月「屢顧爾僕、不輸爾載。」朱子注「僕、將車者也。」『史記』田叔列傳「少孤貧困、為人將軍之長安。」司馬貞索隱「將軍、猶御車也。」『朱子語類』本朝二·法制「蓋此本太僕卿、即執御之職。古者君將升車、則御者先升、執轡中立、以綏度左肩而雙垂之。綏如圓轡。君以兩手援綏而升、立車之左、以左為尊。」『朱子語類』禮四·小戴禮·鄉飲酒「天子乘車、古者君車將駕、則僕御執策立於馬前。既效駕、君雖未升、僕御者先升、則奮衣由右上。以君位在左、故避君空位。五禮新儀却漏了僕人登車一項、至駐車處、却有僕人下車之文、這是一處錯。他處都錯了。」

(7)

『朱子語類』論語十八·子罕篇上·吾有知乎哉章「凡聖人謙辭、未有無因而發者。這上面必有說話、門人想記不全、須求這意始得。如達巷黨人稱譽聖人「博學而無所成名」、聖人乃曰「吾執御矣。」皆是因人譽己、聖人方承之以謙。」

(8)

『朱子語類』論語九·里仁篇下·子曰參乎章「公謹次日復問「吾道一以貫之。」聖人之道、見於日用之間、精粗小大、千條萬目、未始能同、然其通貫則一。如一氣之周乎天地之間、萬物散殊雖或不同、而未始離乎氣之一。」曰「別又看得甚意思出。」曰「夫子之告曾子、直是見他曉得、所以告他。」曰「是也。所以告曾子時、無他、只緣他曉得千條萬目。他人連箇千條萬目尚自曉不得、如何識得一貫。如穿錢、一條索穿得、方可謂之「一貫」。如君之於仁、臣之於忠、父之於慈、子之於孝、朋友之於信、皆不離於此。」『論語集注』里仁「子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。」朱子注「盡己之謂忠、推己之謂恕。而已矣者、竭盡而無餘之辭也。夫子之一理渾然而泛應曲當、譬則天地之至誠無息、而萬物各得其所也。自此之外、固無餘法、而亦無待於推矣。曾子有見於此而難言之、故借學者盡己、推己之目以著明之、欲人之易曉也。」

蓋至誠無息者、道之體也、萬殊之所以一本也。萬物各得其所者、道之用也、一本之所以萬殊也。以此觀之、一以貫之之實可見矣。或曰「中心為忠、如心為恕。」於義亦通。程子曰「以己及物、仁也。推己及物、恕也。違道不遠是也。忠恕一以貫之、忠者天道、恕者人道、忠者無妄、恕者所以行乎忠也。忠者體、恕者用、大本達道也。此與違道不遠異者、動以天爾。」又曰「維天之命、於穆不已」、忠也。「乾道變化、各正性命」、恕也。」又曰「聖人教人各因其才、吾道一以貫之、惟曾子為能達此、孔子所以告之也。曾子告門人曰「夫子之道、忠恕而已矣」、亦猶夫子之告曾子也。中庸所謂「忠恕違道不遠」、斯乃下學上達之義。」『中庸章句』第十三章「忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人。」朱子注「盡己之心為忠、推己及人為恕。違、去也、如春秋傳「齊師違穀七里」之違。言自此至彼、相去不遠、非背而去之之謂也。道、即其不遠人者是也。施諸己而不願亦勿施於人、忠恕之事也。以己之心度人之心、未嘗不同、則道之不遠於人者可見。故己之所不欲、則勿以施之於人、亦不遠人以為道之事。張子所謂「以愛己之心愛人則盡仁」是也。」『論語集注』公冶長「子貢曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人。子曰、賜也、非爾所及也。」朱子注「子貢言我所不欲人加於我之事、我亦不欲以此加之於人。此仁者之事、不待勉強、故夫子以為非子貢所及。程子曰「我不欲人之加諸我、吾亦欲無加諸人仁也。施諸己而不願、亦勿施於人、恕也。恕則子貢或能勉之、仁則非所及矣。」愚謂無者自然而然、勿者禁止之謂、此所以為仁恕之別。」『論語集注』顏淵「仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。在邦無怨、在家無怨。」朱子注「敬以持己、恕以及物、則私意無所容而心德全矣。內外無怨、亦以其效言之、使以自考也。」『論語集注』衛靈公「子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。」朱子注「推己及物、其施不窮、故可以終身行之。」

(9) 『論語集注』雍也「子曰、中庸之為德也、其至矣乎。民鮮久矣。」朱

子注「中者、無過無不及之名也。庸、平常也。至、極也。鮮、少也。言民少此德、今已久矣。程子曰「不偏之謂中、不易之謂庸。中者天下之正道、庸者天下之定理。自世教衰、民不興於行、少有此德久矣。」『朱子語類』論語十五・雍也篇四・中庸之為德章「問「中庸之為德其至矣乎」章。曰、只是不知理、隨他偏長處做將去。謹愿者則小廉曲謹、放縱者則跌蕩不羈、所以中庸說「道之難明」、又說「人莫不飲食、鮮能知味」、只為是不知。」

(10) 「尹氏」は、尹焞(一〇七一―一一四二)、程頤の弟子。『論語精義』卷五上「尹曰、聖人道全而德備、不可偏長目之也。達巷黨人見孔子之大、意其所學者博、而疑其無所成名、謂不以一善得名於世、蓋慕聖人而不知者也。故孔子曰、欲使我何所執而得為名乎、然則吾將執御也。御藝之下者。」

第三章

子曰、麻冕、禮也。今也純、儉。吾從衆。拜下、禮也。今拜乎上、泰也。雖違衆、吾從下。

「麻冕」は、周代の冠礼では、男子が成人になると、冠を被る儀式が行われるが、その最初に被るのが「麻冕」(緇布冠)とも言う)である。その「麻冕」は、二千四百本の縦糸と一千二百本の横糸の麻の糸で作られたものであり、細密がためにその作製作業は多くの手間がかかるから、手に入れ難く、贅沢で豪華なものであった。「今」は、「孔子当時の周朝末期」を指す。「純」は、「絹の糸」の意である。絹の糸を織って「冕」を作製したほうが「麻冕」より儉約できるのである。「衆」には、「冠礼の儀式を執り行うその当時周朝末期の世俗の人々のやり方」と「朝廷での宴会に参加する周朝末期の臣下の拝礼の行い方」と

の両義がある。「拝下」とは、朝廷で宴会が行われる場合の「燕礼」(「燕」は「宴」の意)の規定によれば、君主が臣下にお酒を賜って、臣下が君主に一度拝礼してから、臣下が皆「堂」(宴会場)の西側の階段を降りて再拝し、君主がその臣下の再拝を辞めさせれば、臣下が更に「堂」に上がってまた拝礼する、これで拝礼が完成される、ということである。「拜乎上」とは、孔子当時の周朝末期では、臣下が「堂」を降りて再拝することをせず、ただ「堂」の上で拝礼するだけだった、ということである。

孔子が言われた。「麻冕は、礼である。今は絹糸で冕(冠)を作るのは儉約だ。私は「衆」(「冠礼」の儀式を執り行う今の世俗の人々のやり方)に従う。拝下は、礼である。今はただ堂の上で拝礼しているのは傲慢で節制しないことだ。「衆」(「燕礼」の儀式を執り行う今の臣下の拝礼の行い方)とは違っても、私は拝下に従う。」

集注

麻冕、緇布冠也。純、絲也。儉、謂省約。緇布冠、以三十升布為之、升八十縷、則其經二千四百縷矣。細密難成、不如用絲之省約。

臣與君行禮、當拜於堂下。君辭之、乃升成拜。泰、驕慢也。○程子曰「君子處世、事之無害於義者、從俗可也。害於義、則不可從也。」

訳

「麻冕は、緇布冠なり。」(つまり、麻の冕は、「緇布冠」のことである、ということ。周代の冠礼では、男子が成人になると、冠を被る儀式が行われるが、その最初に被るのが「冕」、つまり「緇布冠」であり、その初冠の儀式に「素朴を尚び古を重んじてほしい」という願いが込められている。孔子当時より以前の時代では、「冕」は麻で作られたものだから、「麻冕」と称されていた。麻で「緇布冠」を作るのは「礼」の規定によるものである。)

「純は、糸なり。儉は、省約を謂ふ。」(つまり、「純とは、絹の糸である。儉は、儉約を言う」ということ。「絲」は、絹の糸である。「麻冕」の場合、「三十升」(升八十縷、則其經二千四百縷矣。八十縷、四十抄也)、つまり、二千四百本の縦糸と一千二百本の横糸)の麻の糸で作られたものであり、細密がためにその作製作業は多くの手間がかかるから、手に入れ難く、贅沢で豪華なものであった。これに対して、「絲」(絹糸)を織って「冕」(緇布冠)を作るのはそれほど手間がかからなくて簡単であつたために、儉約することができた。それ故に、孔子当時の周朝末期では、人々が「麻」の代わりに「絲」(絹糸)を織って「冕」(緇布冠)を作るようになったのである。)²「緇布冠」は、三十升の麻の布で作製するものであり、一升は八十本の経糸であれば、その経糸は二千四百本である。細密がために作製し難く、「絲」(絹)を使って織つたほうが儉約である。

「臣、君と礼を行へば、当に堂下に拜すべし。君之を辞すれば、乃ち升りて拜を成す。」(つまり、臣下が君主に拝礼するのであれば、堂の下で再拝すべきであり、君主がその臣下の再拝を辞めさせれば、臣下が更に堂に上がってまた拝礼する、それで拝礼を完成したのである、ということ。朝廷で宴会が行われる場合の「燕礼」(「燕」は「宴」の意)の規定によれば、君主が臣下にお酒を賜って、臣下が君主に一度拝礼してから、臣下が皆「堂」(宴会場)の西側の階段を降りて再拝し、君主がその臣下の再拝を辞めさせれば、臣下が更に「堂」に上がってまた拝礼する、これを「成拜」と称する(「成拜」、つまり拝礼を完成すること)。孔子当時の周朝末期では、臣下が「堂」を降りて再拝することをせず、ただ「堂」の上で拝礼するだけだったのである。)³「泰は、驕慢なり。」(つまり、「泰」とは、傲慢で節制しないことである、ということ。「驕」は、「矜高」(つまり傲慢で自大のこと)であり、「慢」は、「放肆」(つまり、節制しないこと、心を収斂しないこと)である。「泰」は、また「侈」「奢侈」の意でもあるが、「不奢侈」と言う場合は、事に当たってはいつも「循理」(つまり事物の性質に従うこと)を無

意識に行う、という意味もあるのである。⁽⁴⁾ ○程子(程頤⁽⁵⁾)が言った。「君子が世に処するのは、「事之」(ここでは、つまり、「礼」の儀式を執り行うその行い方)が「義」(つまり、「事之宜」(事物のその「理」(性質)に適した最も適宜な存在状態のこと)であり、即ち「隨事而順理、因時而處宜」(事物に就いてその事物の「理」(性質)に従い、時勢に応じて最も適宜な状況に身を置く)、ということ⁽⁶⁾)を損なうものでなければ、世俗の行い方に従ってもよいのだ。「義」を損なうものであれば、世俗の行い方に従ってはいけないのだ。」

注：

- (1) 『論語注疏』子罕「子曰、麻冕、禮也。今也純、儉。吾從衆。」何晏注「孔曰「冕、緇布冠也、古者績麻三十升布以為之。純、絲也。絲易成、故從儉。」邢昺疏「今也、謂當孔子時。純、絲也。絲易成、故云「純、儉。」用絲雖不合禮、以其儉易、故孔子從之也。」「禮記正義」郊特牲「冠義、始冠之、緇布之冠也。……三加彌尊、喻其志也。冠而字之、敬其名也。」鄭玄注「始冠三加、先加緇布冠也。」「始加緇布冠、次皮弁、次爵弁、冠益尊、則志益大也。」「重以未成人之時呼之。」孔穎達疏「始冠、緇布之冠也。」言三加者、初加緇布冠、次加皮弁、是益尊。至三加爵弁、是彌尊。所以尊者、曉喻其冠者之志意、令其志意益大、初加緇布冠、欲其尚質重古。次加皮弁、欲其行三王之德。後加爵弁、欲其行敬事神明、是志益大也。」「賀氏云、重、難也。難未成人之時呼其名、故以字代之。按冠禮、冠身既冠、見母畢、立于西階、東南面賓、東面字之、曰伯某甫是也。」

- (2) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・麻冕禮也章「麻冕、緇布冠也、以三十升布為之。升八十縷、則其經二千四百縷矣。八十縷、四十抄也。」「朱子語類」雜類「布一筵四十眼、著八十絲為一升。今興化人能為之」

云云。「十升布已難做。至如三十升、不知古人如何做也。若三十升布、則極疏矣。古人諱白、皮弁乃以白鹿皮為之、但加飾焉。如冠之白、但用疏細為吉凶耳。」「朱子語類」禮二・儀禮・士冠「古朝服用布、祭則用絲。詩絲衣「繹賓尸也。」「皮弁素積」、皮弁、以白鹿皮為之。素積、白布為裙。」「論語集解義疏」子罕「子曰、麻冕、禮也。今也純、儉。吾從衆。」「何晏集解「孔安國曰、冕、緇布冠也。古者績麻三十升布以為之。純、絲也。絲易成、故從儉也。」「皇侃義疏「云「麻冕禮也」者、禮、謂周禮也。周禮有六冕、以平板為主。而用三十升麻布、衣板上玄下纁、故云麻冕。」「今也純」者、今、謂周末孔子時也。純、絲也。周末不復用三十升布、但織絲為之、故云「今也」。云「儉者」、三十升布用功巨、多難得、難得則為奢華、而織絲易成、易成則為儉約、故云「儉也」。云「吾從衆」者、衆、謂周末時人也。時既人人從易用絲、故孔子云「吾亦從衆也」。所以從之者、周末每事奢華、孔子寧欲抑奢就儉、今幸得衆共用儉、故孔子從之也。」

(3)

『論語集解義疏』子罕「拜下、禮也。今拜乎上、泰也。雖違衆、吾從下。」「何晏集解「王肅曰、臣之與君行禮者、下拜然後升成禮、時臣驕泰、故於上拜也。今從下禮之恭也。」「皇侃義疏「云「拜下、禮也」者、下、謂堂下也。禮、君與臣燕、君賜酒、皆下堂而再拜、故云「拜下、禮也」。云「今拜乎上、泰也」者、今、謂周末孔子時也。上、謂堂上也。泰、驕泰也。當于時周末、君臣飲燕、臣得君賜酒、不復下堂、但於堂上而拜、故云「今拜乎上、泰也」。」「拜不下堂、是由臣驕泰、故云「泰也」。云「雖違衆、吾從下」者、當時皆違禮而拜上者衆、孔子不從拜上、故云「雖違衆也」。」「違衆而從舊禮拜於下、故云「吾從下也」。」「……」「註王肅曰至恭也」、云臣之云云者、燕義云「君舉旅於賓、及君所賜爵、皆降再拜稽首、升成拜、明臣禮也。案燕義云賓、皆是臣也。臣得君旅及賜爵、降下堂再拜、再拜竟、更升堂又再拜、謂為成拜。成拜者、向在堂下之拜、若禮未成然、故更升堂以成之也。云時臣云云者、周

末時如此也。云「今從下禮之恭也」者、孔子欲從下之禮、是禮為恭也。」
『禮記正義』燕義「君舉旅於賓、及君所賜爵、皆降再拜稽首、升成拜明臣禮也。」鄭玄注「君答拜之、禮無不答、明君上之禮也。臣下竭力盡能以立功於國、君必報之以爵祿、故臣下皆務竭力盡能以立功、是以國安而君寧。禮無不答、言上之不虛取於下也。上必明正道以道民、民道之而有功、然後取其什一、故上用足而下不匱也。是以上下和親而不相怨也。和寧、禮之用也。此君臣上下之大義也。故曰「燕禮者、所以明君臣之義也。」言聖人制禮、因事以託政。臣再拜稽首、是其竭力也。君答拜之、是其報以祿惠也。」孔穎達疏「君舉禮於賓」者、謂舉旅酬之酒以酬賓。「及君所賜爵」者、特賜臣下之爵。「皆降、再拜稽首、升成拜」者、謂賓受君之酬、及臣受君賜爵、皆降自西階、再拜稽首。以受君恩、又升堂、更再拜稽首、以成拜也。故燕禮云「公酬賓、賓降西階下、再拜稽首。公命小臣辭、賓升成拜。」鄭云「升成拜、復再拜稽首也。」至禮殺之後、賓下堂、是欲拜。君則辭之、賓未拜也。賓乃升堂、再拜稽首。鄭注云不言成拜者、以其下堂、未拜故也。燕禮云「公卒觴、賓下拜、小臣辭。賓升、再拜稽首。」鄭注云「不言成拜者、為拜故下、賓未拜也。下不敢輒拜、禮殺也。」

(4) 『朱子語類』大學三・傳十章釋治國平天下「趙唐卿問「十章三言得失、而章句云「至此而天理存亡之機決矣。」何也。」曰「他初且言得衆、失衆、再言善、不善、意已切矣。終之以忠信、驕泰、分明是就心上說出得失之由以決之。忠信乃天理之所以存、驕泰乃天理之所以亡。」大學章句」十章「是故君子有大道、必忠信以得之、驕泰以失之。」朱子注「道、謂居其位而修己治人之術。發己自盡為忠、循物無違謂信。驕者矜高、泰者侈肆。此因上所引文王、康誥之意而言。章內三言得失、而語益加切、蓋至此而天理存亡之機決矣。」『論語集注』泰伯「君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣。」朱子注「暴、粗厲也。慢、放肆也。」『孟子集注』滕文公章句下「彭更問曰「後車數十乘、從者數

百人、以傳食於諸侯、不以泰乎。」孟子曰「非其道、則一簞食不可受於人。如其道、則舜受堯之天下、不以為泰、子以為泰乎。」朱子注「泰、侈也。」『朱子語類』論語四・學而篇下「貧而無詔章」問「富而好禮。」曰「只是不奢侈。凡事好循理、不恁地勉強。好、有樂意、便全不見那驕底意思。有人亦合禮、只是勉強如此、不是好。」『朱子語類』論語四・學而篇下「夫子至於是邦章」儉、謂節制、非謂儉約之謂。只是不放肆、常收斂之意。」

(5) 『程子』は、ここでは、程頤（程伊川）である。『論語精義』「伊川解曰、麻冕、用純儉而無害、從衆可也。拜乎上、泰也。泰、謂簡慢。事君不可泰也、寧違衆也。君子處世、事之無害於義者、從俗可也。害於義、則不可從也。」

(6) 『論語集注』學而「信近於義、言可復也。」朱子注「義者、事之宜也。」『論語集注』里仁「子曰、君子喻於義、小人喻於利。」朱子注「義者、天理之所宜。」『論語集注』子路「上好義、則民莫敢不服。」朱子注「好義、則事合宜。」『孟子集注』離婁章句上「義、人之正路也。」朱子注「義者、宜也、乃天理之當行、無人欲之邪曲、故曰正路。」『孟子集注』離婁章句下「孟子曰、非禮之禮、非義之義、大人弗為。」朱子注「察理不精、故有二者之蔽。大人則隨事而順理、因時而處宜、豈為是哉。」

第四章

子絕四、毋意、毋必、毋固、毋我。

「絶」は、ここでは、つまり、「意」「必」「固」「我」の四者がすべて「無」、ということである。「毋」は、「無」の意である。「意」は、ここでは、「私意」つまり私意・憶測のことである。「必」は、ここでは、「期必」、つまり、事前に事が思う通りになることを望む、ということである。「固」は、固執のことであるが、事後に自分の非を頑な

に認めない、ということである。「我」とは、自分にとって便利なこととしないことであり、即ち「私意」が生じたものである。

孔子には四者が皆ありません。つまり、「意」もなく、「必」もなく、「固」もなく、「我」もない、ということです。

集注

絶、無之盡者。母、史記作「無」是也。意、私意也。必、期必也。固、執滯也。我、私己也。四者相為終始、起於意、遂於必、留於固、而成於我也。蓋意必常在事前、固我常在事後、至於我又生意、則物欲牽引、循環不窮矣。○程子曰「此母字、非禁止之辭。聖人絶此四者、何用禁止。」張子曰「四者有一焉、則與天地不相似。」楊氏曰「非知足以知聖人、詳視而默識之、不足以記此。」

訳

「絶は、無きの尽くる者。」(つまり、「絶」は、「無」の尽きるもの、ということ。「無」の尽きるものとは、ここでは、「意、必、固、我」の四者がすべて「無」、つまり、「無意、無必、無固、無我」の意と解釈する、ということである。張載(字は子厚、横渠先生)は、この「絶」を禁止の言葉とし、孔子がこの四者を学ぶ者に禁絶して為さないようにさせる、という。)
「母は、史記に無に作る、是なり。」(つまり、「母」の字は、『史記』には「無」の字になっていて、「無」の字のほうが正しい、ということ。張載は、この「母」をも禁止の言葉とし、孔子が人にこの四者を禁絶することを教えている、という。だが、程伊川(程頤)は「この「母」の字は、禁止の辞ではない。」と言う。程伊川は、聖人にはもともとこの四者がないのだから、禁止する必要があるのだ、という。)
「意は、私意なり。」(つまり、「意」は、「私意」のことである、ということ。「聖人之心更無些子渣滓。」(聖人の心にはもともとほんの少しの「渣滓」もない。)というように、「私意」は「渣滓」

とも言い、聖人の心にはほんの少し「私意」もなく、その心は透き通った透明体である。また、「不順理、則只是自家私意。」(理に従わなければ、ただ自分の私意に過ぎないのだ。)ともいうように、「私意」は「理」に従わないことである。「理」は、「則」「徳」「実体」の諸語と同義の場合があり、「耳之徳聰、目之徳明。」(能視遠謂之明、所視不遠、不謂之明。能聽徳謂之聰、所聽非徳、不謂之聰。)(「耳の徳は「聰」で、目の徳は「明」である。」「よく遠いところが見えるのを「明」と言い、見えるのが遠くなければ「明」とは言えない。よく聞こえるのを「聰」と言い、聞こえるのがよく聞こえなければ「聰」とは言えないのだ。)」というように、耳と目の「徳」は即ち、耳と目の「性質」としての機能・能力であり、「窮理」(致知「格物」とは、つまり、事物の性質を窮めることである。また、「今試以衆人之力共推一舟於陸、必不能行、方見得舟果不能以行陸也、此之謂實體。」(いま、試みて多くの人が力を合わせて一艘の舟を陸で推し進めてみても、きっと舟を前進させることができないから、そこで、船が本当に陸では前進することができないということを知るのである。これを「実体」と言うのだ。))というように、「理」(「実体」)は、実験することによって得た客観的な認識・知識である。それ故に、「私意」は、「理」に従わないことだから、それがつまり、現在のいう「私意・憶測」を意味するものである。また「人欲」「私欲」も「私意」と同義の用語として用いられる場合がある。)
「必は、必を期すなり。」(つまり、「必」は、思う通りになることを望む、ということ。「必」は、ここでは、「期」(予期する、望む)のような意味である。「大人言行、不先期於信果。」(「大人」(つまり「仁者」「君子」)の言動は、予めその通りになるように望むことをしない。))というように、「必」とは、事前に事が思う通りになることを望むことである。)
「固は、執滯なり。」(つまり、「固」は、固執のことである、ということ。「如做一件事不是了、只管固執、道我做得是。」(例えば一つの事を正しく処理していなかったのに、ひたすら固執して、「私は正しく処理できた」と言う。))というように、事後に自分の非を頑な

に認めない、ということである。^⑤「我は、己を私するなり。」（つまり、「我」は、自分にとって便利なことしかしない、ということ。「只管就上計較利害。」（ひたすら利益と損害を細かく計算し比較する。）というように、「我」は、自分のことしか考えないことだが、即ち「私意」が生じたものである。^⑥）「四者は、終始を相ひ為す。意に起り、必に遂げ、固に留まり、而して我に成るなり。」（つまり、「意」「必」「固」「我」の四者が、終わりと始まりを互いにするものである。「不問理之是非」「理」に適うかどうかを問わず）一つの事を行おうと思うと「意」が起り、その事が思う通りになることを事前に望み「必」に遂げ、その事が事後に望み通りになった或いはならなかったにもかかわらず固執して心に留まり「固」に留まり、そこで自分のことしか考えないことになる（「我」になる）、ということ。自分のことしか考えないことは即ち「意」（私意）が生じたものである。それ故に、「意、是我之發端。我、是意之成就。」（「意」は、「我」の発端である。「我」は、「意」の成就である。）と言うのである。この四者は、「相因如循環」（互いに起因するのが循環することのようだ）「展轉不已」（循環して已まない）というようなものである。「聖人作事、初無私意。或為、或不為、不在己意、而惟理之是從、又何固、必、有我哉。」（聖人が事を為すのは、最初から「私意」がないものである。或いは為す、或いは為さない、自分の「意」によるのではなくて、ただ「理」に従うだけだから、またどうして「固」「必」「我」があるのだろうか。）というように、聖人の場合、事物に当たっては、ただ事物の「理」（性質）に従うだけであって、この四者がなければ（^⑦）思うに、「意」は必ず常に事前に起り、「固」「我」は常に事後にあり、「我」がまた「意」を生ずるに至れば、「物欲」（朱子哲学においては、人間の不善が生ずる原因として、「氣稟」と「物欲」が挙げられ、この二者とともに生まれつきのものであり、互いに影響し合うものである。人間が外物に接して心が動いて「七情」が現れ、「情既熾而益蕩、其性鑿矣。」（情）が激しければ逸脱しやすく、その「性」（仁義礼智の徳）が損なわれるのである。）

というように、外物に接して生じた情欲も「性」を損なうことがある。「氣稟」と「物欲」に蔽われないためには、「致知」「格物」をしなければならぬのである。「物欲」は、つまり、外物に接して生じた情欲のことである。「物欲」が牽引して、「意、必、固、我」の四者が循環して已まないのである。○程子（程頤^⑧）が言った。「この「母」の字は、禁止の言葉ではない。聖人にはもともとこの四者が無いのだから、どうして禁止する必要があるか。」張子（張載^⑩）が言った。「意」「必」「固」「我」の四者の中一つでもあれば、「天地と相ひ似ず。」（つまり、「仁」に違うのである。）^⑪楊氏（楊時、字は中立、龜山先生^⑫）が言った。「智」（知以て聖人を知るに足り）の「知」は、『論語精義』では「智」になっているから、それに従う。「智者、知之所及。」（智とは、知ることの及ぶところである。）^⑬とあるように、「智」は、ここでは、つまり、「持っている知識」の意である。その知識が聖人のことを十分に理解することができ、詳細に観察して「默識」（つまり、口に出さずに内心に記憶して心が聖人と通じている）^⑭人ではなければ、これを記録することができないのである。」

注：

（１）『朱子語類』中庸三・第二十二章「問「至誠盡性、盡人、盡物」如何是「盡」。曰「性便是仁義禮智。「盡」云者、無所往而不盡也。盡於此不盡於彼、非盡也。盡於外不盡於内、非盡也。盡得這一件、那一件不盡、不謂之盡。盡得頭、不盡得尾、不謂之盡。如性中之仁、施之一家、而不能施之宗族、施之宗族、不能施之鄉黨、施之鄉黨、不能施之國家天下、皆是不盡。至於盡禮、盡義、盡智、亦如此。至於盡人、則凡或仁或鄙、或夭或壽、皆有以處之、使之各得其所。至於盡物、則鳥獸蟲魚、草木動植、皆有以處之、使之各得其宜。盡性盡人盡物、大概如此。」又問「盡心亦是如此否。」曰「未要說同與不同。且須自看如何是心、如何是性、便自見得不同處。如問黑白、且去認

取那箇是白、那箇是黑、則不必問、而自能知其不同矣。」因曰「若說大概、則盡心是知、盡性行。盡心是見得箇渾淪底、盡性是於零碎事物上見。盡心是見得許多條緒都包在裏許、盡性則要隨事看、無一之或遺。且如人之一身、雖未便要歷許多事、十事盡得五事、其餘五事心在那上、亦要盡之。其他事、力未必能為、而有能為之理、亦是盡也。至誠之人、通身皆是實理、無少欠闕處、故於事事物物無不盡也。」

『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子絕四章「橫渠之意、以「絕」為禁止之辭。是言聖人將這四者使學者禁絕而勿為。「毋」字亦是禁止之意。故曰「自始學至成德、竭兩端之教也。」必、是事之未來處。固、是事之已過處。」

(2)

中華書局点校本『史記』孔子世家「孔子以四教、文、行、忠、信。絕四、無意、無必、無固、無我。」『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子絕四章「橫渠之意、以「絕」為禁止之辭。是言聖人將這四者使學者禁絕而勿為。「毋」字亦是禁止之意。故曰「自始學至成德、竭兩端之教也。」必、是事之未來處。固、是事之已過處。」また、「横渠謂「意、必、固、我、自始學至成德、竭兩端之教」者、謂夫子教人絕此四者、故皆以「毋」字為禁止之辭。」「論語精義」卷五上「伊川解曰、任意之與私己、必行之與固執、各殊也。……又曰、毋、非禁止之詞。聖人絕此四者、何用禁止。」

(3)

『朱子語類』孟子七・離婁下・仲尼不為己甚章「凡所謂聖者、以其渾然天理、無一毫私意。」「朱子語類」易十一・上繫下・右第十章「聖人胸中都無纖毫私意。」「朱子語類」論語十六・述而篇・飯疏食章「聖人之心更無些子渣滓。」「朱子語類」論語十八・子罕篇上・子絕四章「這「意」字、正是計較底私意。」「また、「問「意如何毋得。」「曰「凡事順理、則意自正。」「毋意」者、主理而言。不順理、則只是自家私意。」「朱子語類」論語二十七・衛靈公篇・子張問行章「又問「質美者明得盡、渣滓便渾化、與天地同體」、是如何。」「曰「明得透徹、渣滓自然渾化。」

又問「渣滓是甚麼。」「曰「渣滓是私意人欲。天地同體處、如義理之精英。渣滓是私意人欲之未消者。人與天地本一體、只緣渣滓未去、所以有間隔。若無渣滓、便與天地同體。」「克己復禮為仁」、已是渣滓、復禮便是天地同體處。」「有不善未嘗不知、不善處是渣滓。顏子「三月不違仁」、既有限、此外便未可知。如曾子「為人謀而不忠、與朋友交而不信、傳而不習」、是曾子渣滓處。漆雕開言「吾斯之未能信」、皆是有些渣滓處。只是質美者、也見得透徹、那渣滓處都盡化了。若未到此、須當莊敬持養、旋旋磨擦去教盡。」「朱子語類」學五・讀書法下「人惟私意、聖賢所以留千言萬語、以掃滌人私意、使人人全得惻隱、羞惡之心。」「朱子語類」大學三・傳六章釋誠意「自欺只是於理上虧欠不足、便胡亂且欺諉過去。如有得九分義理、雜了一分私意、九分好善、惡惡、一分不好、不惡、便是自欺。」「朱子語類」大學二・經下「格物、致知、正心、誠意、不可著纖毫私意在其中。椿錄云「便不是矣。」「致知、格物、十事格得九事通透、一事未通透、不妨。一事只格得九分、一分不透、最不可。凡事不可著箇「且」字。」「且」字、其病甚多。」「朱子語類」程子之書三「致道問「仁則一、不仁則二、如何。」「曰「仁則公、公則通、天下只是一箇道理。不仁則是私意、故變詐百出而不一也。」「朱子語類」論語十二・雍也篇「哀公問弟子章「克己復禮」、到得人欲盡、天理明、無些渣滓、一齊透徹、日用之間、都是這道理。」「朱子語類」性理三・仁義禮智等名義「耳之德聰、目之德明、心之德仁。」「朱子語類」孟子九・告子上・性無善無不善章「天生蒸民、有物有則。」「蓋視有當視之則、聽有當聽之則、如是而視、如是而聽、便是。不如是而視、不如是而聽、便不是。謂如「視遠惟明、聽德惟聰」。能視遠謂之明、所視不遠、不謂之明。能聽德謂之聰、所聽非德、不謂之聰。視聽是物、聰明是則。推至於口之於味、鼻之於臭、莫不各有當然之則。所謂窮理者、窮此而已。」「朱子語類」性理一・人物之性氣質之性「問「理是人物同得於天者。如物之無情者、

亦有理否。」曰「固是有理、如舟只可行之於水、車只可行之於陸。」『朱子語類』大學二·經下「人多把這道理作一箇懸空底物。大學不說窮理、只說箇格物、便是要人就事物上理會、如此方見得實體。所謂實體、非就事物上見不得。且如作舟以行水、作車以行陸。今試以衆人之力共推一舟於陸、必不能行、方見得舟果不能以行陸也、此之謂實體。」

(4)

『朱子語類』論語十八·子罕篇上·子絕四章「必、是事之未來處。」また、「必、是先事而期必。」『朱子語類』孟子二·公孫丑上之上·問夫子加齊之卿相章「或問「必有事焉、而勿正」。曰「正便是期必。集義多、則浩然之氣自生。若著一箇意在這裏等待他生、便為害。今日集得多少義、又等他氣生。明日集得多少義、又等他氣生、這都是私意、只成得一箇助長。恁地、則不惟氣終不會生、這所集之義已不得為是了。」

『孟子集注』離婁章句下「孟子曰、大人者、言不必信、行不必果、惟義所在。」朱子注「必、猶期也。大人言行、不先期於信果、但義之所在、則必從之、卒亦未嘗不信果也。尹氏云「主於義、則信果在其中矣。主於信果、則未必合義。」王勉曰「若不合於義而不信不果、則妄人爾。」

『孟子集注』離婁章句上「惟大人為能格君心之非。君仁莫不仁、君義莫不義、君正莫不正。一正君而國定矣。」朱子注「惟有大人之德、則能格其君心之不正以歸於正、而國無不治矣。大人者、大德之人、正己而物正者也。」

『孟子集注』離婁章句下「孟子曰、非禮之禮、非義之義、大人弗為。」朱子注「察理不精、故有二者之蔽。大人則隨事而順理、因時而處宜、豈為是哉。」

(5)

『朱子語類』論語十八·子罕篇上·子絕四章「必、在事先。固、在事後。如做一件事不是了、只管固執、道我做得的。」また「必、在事先。固、在事後。固、只是滯不化。」また「固、是事之已過處。」

(6)

『朱子語類』論語十八·子罕篇上·子絕四章「曰「我、是有人己之私否。」曰「人自是人、己自是己、不必把人對說。我、只是任己私去做、便於我者則做、不便於我者則不做。只管就已上計較利害、與人何相關。」

(7)

人多要我合一、人我如何合得。呂銘曰「立己與物、私為町畦。」他們都說人已合一。克己、只是克去己私、如何便說到人己為一處、物我自有一等差。只是仁者做得在這裏了、要得人也如此、便推去及人。所以「親親而仁民、仁民而愛物」。人我只是理一、分自不同。」また「我、私意成就。」また「我、有方也。方、所也、猶言有限隔也。」

『朱子語類』論語十八·子罕篇上·子絕四章「意、私意之發。必、在事先。固、在事後。我、私意成就。四者相因如循環。」また、「曰「必、固之私輕。意、我之私重否。」曰「意、必、固、我、只一套去。意是初創如此、有私意、便到那必處。必、便到固滯不通處。固、便到有我之私處。意、是我之發端。我、是意之成就。」また、「意、必、固、我、亦自有先後。凡起意作一事、便用必期之望。所期之事或未至、或已過、又執滯而留於心、故有有我之患。意是為惡先鋒、我是為惡成就。正如四德、貞是好底成就處、我是惡底成就處。」また、「余國秀問「母意、必、固、我。」曰「意、是發意要如此。必、是先事而期必。固、是事過而執滯。到我、但知有我、不知有人。必之時淺、固之時長。譬如士人赴試、須要必得、到揭榜後、便已必不得了。但得則喜、喜不能得化。不得則慍、慍亦不能得化、以此知固時久也。意是始、我是終、必、固在中間、亦是一節重似一節也。」又云「言必信、行必果。」言自合著信、行自合著果、何待安排。才有心去必他、便是不活、便不能久矣。」また、「意者、有我之端。我、則意之效。先立是意、要如此而為之、然後有必、有固、而一向要每事皆已出也。聖人作事、初無私意。或為、或不為、不在己意、而惟理之是從、又何固、必、有我哉。」また、「問「意、私意也。我、私己也。」看得來私己是箇病根、有我則有意。」曰「意是初發底意思、我則結撮成箇物事矣。有我則又起意、展轉不已。」また、「吳仁父問「意、必、固、我。」曰「須知四者之相生。凡人做事、必先起意、不問理之是非、必期欲事成而已。事既成、是非得失已定、又復執滯不化、是之謂固。三者只成就得一箇我。及至我之根源愈大、

少間三者又從這裏生出。我生意、意又生必、必又生固、又歸宿於我。」また、「吳伯英問「意、必、固、我」。曰「四者始於我、而終於我。人惟有我、故任私意。既任私意、百病俱生。做事未至、而有期必之心。事既有過、則有固滯之患。凡若此者、又只是成就一箇我耳。」また、「絶四」。先生曰「此四者亦是相因底始於有私意。有私意、定是有期必。既期必、又生固滯、却結裏做箇有我出來。」また、「問「意、必、固、我、有無次第。」曰「意、是私意始萌、既起此意、必、是期要必行。固、是既行之後、滯而不化。我、是緣此後便只知有我。此四者似有終始次序。必者、迎之於前。固者、滯之於後。」

(8)

『朱子語類』性理一・人物之性氣質之性「此只當以人品賢愚清濁論。有合下發得善底、也有合下發得不善底、也有發得善而為物欲所奪、流入於不善底。極多般樣。」『朱子語類』學三・論知行「所謂窮理、大底也窮、小底也窮、少間都成一箇物事。所謂持守者、人不能不牽於物欲、才覺得、便收將來。久之、自然成熟。非謂截然今日為始也。」『朱子語類』學七・力行「不為物欲所昏、則渾然天理矣。」『朱子語類』大學一・經上「問「明明德」。曰「人皆有丟明處、但為物欲所蔽、剔撥去了。只就明處漸明將去。然須致知、格物、方有進步處、識得本來是甚麼物。」また、「人本有此理、但為氣稟物欲所蔽。若不格物、致知、事至物來、七顛八倒。」また、「蓋人心至靈、有什麼事不知、有什麼事不曉、有什麼道理不具在這裏。何緣有不明。為是氣稟之偏、又為物欲所亂。」また、「人本來皆具此明德、德內便有此仁義禮智四者。只被外物汨沒了不明、便都壞了。所以大學之道、必先明此明德。若能學、則能知覺此明德、常自存得、便去刮剔、不為物欲所蔽。」『論語集注』雍也「哀公問、弟子孰為好學。孔子對曰、有顏回者好學、不遷怒、不貳過。不幸短命死矣。今也則亡、未聞好學者也。」朱子注「曰「天地儲精、得五行之秀者為人。其本也真而靜。其未發也五性具焉、曰仁、義、禮、智、信。形既生矣、外物觸其形而動於中矣。其中動

而七情出焉、曰喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲。情既熾而益蕩、其性鑿矣。」『朱子語類』大學五或問下・傳五章・然則吾子之意亦可得而悉聞一段「又問「客氣暴怒、害事為多、不知是物欲耶、氣稟耶。」曰「氣稟物欲亦自相連著。且如人稟得性急、於事上所欲必急、舉此一端、可以類推。」又曰「氣稟、物欲生來便有、要無不得、只逐旋自去理會消磨。大要只是觀得理分明、便勝得他。」

(9)

『論語精義』卷五上「伊川解曰、任意之與私己、必行之與固執、各殊也。又語錄曰、意者、任意。必者、必行。固者、固執。我者、私己。又曰、無自任私意、無必為、無固執、無有己。又曰、敬、則無己。可克學之始、則須從絶四去。又曰、君子之學在于意必固我、既亡之後、而復于喜怒哀樂未發之前、則學之至也。又曰、意必固我、既亡之後、必有事焉、此學者所宜盡心也。又曰、不以已待物、而以物待物、是則無我。又曰、至公無私、大同無我、雖渺然一身在天地之間、而與天地無以異也、夫何礙焉。佛氏厭苦根塵、則是自利而已矣。又曰、母意者、不妄意也。母我者、循理不可守己也。又曰、無私意、無必為、無固滯、無彼我、乃曾子所言也。又曰、毋、非禁止之詞、聖人絶此四者、何用禁止。意與我相近、固與必相近、須要分別出不同處。意與志別、志是所存處、意是發動處、如先意承志自別也。意發而當則是理也、發而不當是私意也。問、聖人莫是任理而不任意否。曰、然。」『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子絶四章「問「意、必、固、我、伊川以「發而當者、理也。發而不當者、私意也」。此語是否。」曰「不是如此。所謂「母意」者、是不任己意、只看道理如何。見得道理是合當如此做、便順理做將去、自家更無些子私心、所以謂之「母意」。若才有些安排布置底心、便是任私意。若元不見得道理、只是任自家意思做將去、便是私意。縱使發而偶然當理、也只是私意、未說到當理在。伊川之語、想是被門人錯記了、不可知。」

(10)

『張子正蒙』中正篇第八「意、有思也。必、有待也。固、不化也。我、

有方也。四者有一焉、則與天地為不相似。」『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子絕四章「必、在事先。固、在事後。有意、必、固三者、乃成一箇我。如道是我恁地做、蓋固滯而不化、便成一箇我。橫渠曰「四者有一焉、則與天地不相似。」また、「問」横渠謂「四者有一焉、則與天地不相似。」略有可疑。」曰「人之為事、亦有其初未必出於私意、而後來不能化去者。若曰「絕私意、則四者皆無」、則曰「子絕一」便得、何用更言「絕四」。以此知四者又各是一病也。」

(11) 『周易本義』繫辭上傳「與天地相似、故不違。知周乎萬物而道濟天下、故不過。」朱子注「此聖人盡性之事也。天地之道、知仁而已。知周萬物者、天也。道濟天下者、地也。知且仁、則知而不過矣。」

(12) 『論語精義』卷五上「楊曰、母意者、母私意而已。若誠意、則不可無也。母、必、則惟義所在。無固、則與時偕行。母我、則道通為一。非智足以知聖人、詳視而默識之、不足以記此。」

(13) 『孟子集注』萬章章句下「始條理者、智之事也。終條理者、聖之事也。」朱子注「智者、知之所及。聖者、德之所就也。」『朱子語類』大學二・經下「所以貴格物、如佛、老之學、它非無長處、但它只知得一。路。其知之所及者、則路逕甚明、無有差錯。其知所不及處、則皆顛倒錯亂、無有是處、緣無格物工夫也。」

(14) 『論語集注』述而「子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。」朱子注「識、記也。默識、謂不言而存諸心也。一說、識、知也。不言而心解也。前說近是。」『論語集注』先進「子曰、回也非助我者也、於吾言無所不說。」朱子注「助我、若子夏之起予、因疑問而有以相長也。顏子於聖人之言、默識心通、無所疑問。故夫子云然、其辭若有憾焉、其實乃深喜之。」

第五章

子畏於匡。曰、文王既沒、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得

與於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何。

〔匡〕とは、匡人（宋国匡城の簡子という人が率いた鎧を着た兵士）が孔子を包囲した、ということである。「文」は、ここでは、礼楽制度であるが、「道」の顯現であるから、「道」と言ってもよいものである。「茲」は、「ここ」のことであるが、孔子が自分を指して言っているもので、即ち「この我が身」の意である。「後死者」とは、「まだ亡くなっていない人」のことであるが、ここでは、つまり、「まだ死んでいないこの私」という意味である。）

孔子が匡人に警戒していた。孔子が言われた。「文王は既にお亡くなりになったのだが、その文（つまり文王の道）はこの我が身にあるのではないか。もし天がこの文を滅ぼそうとするならば、まだ死んでいないこの私はこの文を滅ぼさずかることを得ないはずだ。天がまだこの文を滅ぼしていないからには、匡人が私に何をすることができるのだろうか（つまり、匡人がきつと天の意思に逆らって私を殺害することができるはずがない、ということである。）」

集注

畏者、有戒心之謂。匡、地名。史記云「陽虎曾暴於匡、夫子貌似陽虎、故匡人圍之。」

道之顯者謂之文、蓋禮樂制度之謂。不曰道而曰文、亦謙辭也。茲、此也、孔子自謂。

喪、與、皆去聲。○馬氏曰「文王既沒、故孔子自謂後死者。言天若欲喪此文、則必不使我得與於此文。今我既得與於此文、則是天未欲喪此文也。天既未欲喪此文、則匡人其奈我何。言必不能違天害已也。」

訳

「畏」とは、「戒心」(つまり、警戒する心)^①があるということである。「匡」は、地名(つまり、宋国の匡城のこと)^②である。「史記」(『史記』孔子世家)にはこのように記している。「陽虎嘗て匡に暴す。夫子の貌陽虎に似たり、故に匡人之を囲む。」(つまり、陽虎は以前、宋国匡城の人々に対して暴虐を行ったことがあり、孔子の容貌は陽虎に似ていて、それ故に、匡人は孔子を包围した、ということ。「陽虎」は、名は虎、字は貨、故に別名は陽貨、魯国の大夫季氏の家臣であったが、季桓子を囚えて魯国の国政を独裁したことがあった人物である。「匡人」とは、匡城の簡子という人が率いた鎧を着た兵士のことである。)^③

「道の顕なる者は、之を文と謂ひ、蓋し礼楽制度の謂ひなり。」(つまり、「道」の顕現したものは、これを「文」と言い、思うに、「礼楽制度」のことである、ということ。「道」は、ここでは、つまり、人間や万物には生まれながらにしてそれぞれ異なる「性」(「理」、つまり、性質)が備わっていて、その「性」(「理」)に従っての人々の共に由るところのものが即ち「道」である。例えば、牛には鼻輪を付けるが、馬には頭絡を付ける、これは、牛と馬とのその「性」(性質)が異なることに由るものである、というようなことである。「礼楽制度」は、ここでは、つまり、古代(夏殷周の三代)の先王や聖人たちが思慮を尽くして作成した礼楽制度のことである。それは万世において実施されても弊害のないものだから、滅ぼされて失ってしまつて考証できなくなることを常に恐れていたのである。)^④孔子が「道」と言われず「文」と言われたのは、「亦た謙辞なり。」(つまり、これもまた孔子が謙虚な表現で表すものである、ということ。即ち、「文」は、ここでは、「道」の意であり、文王は既にお亡くなりになったのだが、文王の「道」はまだここに(つまり孔子に)存している、ということを謙虚に表現したものである。)^⑤「茲は、此なり、孔子自ら謂ふ。」(つまり、「茲」は、「ここ」であり、孔子が自身を指しておっしゃったのである、ということ。「在茲」(ここ)(つまりこの

我が身)にある)とおっしゃったのは、つまり、「天未だ斯の文を喪はさざるなり。」(天がまだこの文王の道を滅ぼしていないのだ。)ということである。)^⑥

「喪」「與」は、皆「去声」(皆第四声、つまり、「喪」は「滅ぼす」の意で、「與」は「あずかる」の意)である。○馬氏(馬融、字は季長、後漢の政治家、学者)^⑦が言った。「文王既に没す。故に孔子自ら後に死する者と謂ふ。」(つまり、文王は既にお亡くなりになったのであり、だから、孔子が自分を指して「後死者」(つまり、まだ亡くなっていない人、まだ死んでいないこの私)と言われている、ということ。この文は、「論語集解」では何晏が孔安国の注を引用したものであり、馬融の注ではない。)^⑧「その意味はこうである。『天若し此の文を喪はさんと欲すれば、則ち必ず我をして此の文に与ることを得さしめず。』(つまり、天がもしこの文を滅ぼそうとするならば、きつと私にこの文をあずかることができるようにはさせないはずだ、ということ。孔子のこの言葉は、これもまた匡人に包围されて緊急状態の中で、思わずおっしゃったものである。)^⑨『今我既に此の文に与ることを得れば、則ち是れ天の未だ此の文を喪はさんと欲せざるなり。』(つまり、いま私は既にこの文をさずかることを得たのだから、これは天がまだこの文を滅ぼそうとしないことだ、ということ。『天の將に斯の文を喪はさんとす』、『天の未だ斯の文を喪はさず』、これらの語を見ると、ただ天の意思の如何を見るだけである。ただ、ここが重要ではなく、重要なのは聖賢の「大節」(命の危機に直面しても動揺しない節操)が現れ出たその所以を見ることである。)^⑩「天既に未だ此の文を喪はさんと欲せざれば、則ち匡人其れ我を奈何せん。必ず天に違ひて己を害すること能はざるを言へるなり。」(つまり、天が既にまだこの文を滅ぼそうとしないからには、匡人が私に何をすることができののだろうか。つまり匡人がきつと天の意思に逆らつて私を殺害することができないはずがないということである、ということ。『匡人其れ我を奈何せん。』とはおっしゃつても、もしかしたら匡人に殺されるかも

しれない。孔子にも十分に自信があったわけではないのである。¹¹⁾

注・

(1) 『孟子集注』公孫丑章句下「當在薛也、予有戒心。辭曰「聞戒。」故為兵餽之、予何為不受。」朱子注「時人有欲害孟子者、孟子設兵以戒備之。薛君以金餽孟子、為兵備。辭曰「聞子之有戒心也。」」

(2) 『史記』孔子世家「將適陳、過匡。……匡人聞之、以為魯之陽虎。陽虎嘗暴匡人、匡人於是遂止孔子。」張守節正義「故匡城、在滑州匡城縣西南十里。」司馬貞索隱「匡、宋邑也。家語云「匡人簡子以甲士圍夫子。」」

(3) 『史記』孔子世家「匡人聞之、以為魯之陽虎。陽虎嘗暴匡人、匡人於是遂止孔子。孔子狀類陽虎、拘焉五日。」『論語集注』陽貨「陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚。」朱子注「陽貨、季氏家臣、名虎。嘗囚季桓子而專國政。」『論語注疏』陽貨「陽貨欲見孔子、孔子不見。」何晏注「孔曰、陽貨、陽虎也。季氏家臣、而專魯國之政、欲見孔子、使仕。」邢昺疏「陽貨欲見孔子」者、陽貨、陽虎也。蓋名虎、字貨。為季氏家臣、而專魯國之政、欲見孔子、將使之仕也。」『孔子家語』困誓「孔子之宋、匡人簡子以甲士圍之。子路怒、奮戟將與戰。孔子止之、曰「惡有脩仁義而不免俗者乎。夫詩、書之不講、禮樂之不習、是丘之過也。若以述先王好古法而為咎者、則非丘之罪也。命夫、歌。予和汝。」子路彈琴而歌、孔子和之、曲三終、匡人解甲而罷。」

(4) 『中庸章句』第一章「天命之謂性、率性之謂道。」朱子注「道、猶路也。人物各循其性之自然、則其日用事物之間、莫不各有當行之路、是則所謂道也。」『論語集注』為政「五十而知天命。」朱子注「天命、即天道之流行而賦於物者、乃事物所以當然之故也。」『論語集注』學而「子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉、可謂好學也已。」朱子注「凡言道者、皆謂事物當然之理、人之所共由者

也。」「『朱子語類』學三・論知行「如穿牛鼻、絡馬首、這也是天理合當如此。若絡牛首、穿馬鼻、定是不得。」『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子畏於匡章「問「天之將喪斯文」、「未喪斯文」、文即是道否。」曰「既是道、安得有喪、未喪。文亦先王之禮文。聖人於此、極是留意。蓋古之聖人既竭心思焉、將行之萬世而無弊者也、故常恐其喪失而不可考。」また、「問「呂氏曰「文者、前後聖之所修、道則出乎天而已。故孔子以道之廢興付之命、以文之得喪任諸己。」曰「道只是有廢興、却喪不得。文如三代禮樂制度、若喪、便掃地。」」

(5) 『論語集注』為政「子曰、「吾十有五而志於學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。」朱子注「愚謂聖人生知安行、固無積累之漸、然其心未嘗自謂已至此也。是其日用之間、必有獨覺其進而人不及知者。故因其近似以自名、欲學者以是為則而自勉、非心實自聖而姑為是退託也。後凡言謙辭之屬、意皆放此。」

(6) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子畏於匡章「文不在茲乎」、言「在茲」、便是「天未喪斯文。」『論語集義疏』子罕「文王既沒、文不在茲乎。」何晏集解「孔安國曰、茲、此也。言文王雖已沒、其文見在此。此、自此、其身也。」皇侃義疏「曰「文王既沒文不在茲乎」者、孔子得園而自說己德、欲使匡人知己。茲、此也。孔子自此、已也。言昔文王聖德、有文章以教化天下也。文王今既沒、則文章宜須人傳。傳文章者、非我而誰。故云「文王既沒、文不在茲乎」、言此我當傳之也。」

(7) 『後漢書』卷九十八・馬融列傳五十上「馬融字季長、扶風茂陵人也。……三遷、桓帝時為南郡太守。……。獻帝時位至太傅。……。注孝經、論語、詩、易、三禮、尚書、列女傳、老子、淮南子、離騷、所著賦、頌、碑、誄、書、記、表、奏、七言、琴歌、對策、遺令、凡二十一篇。」

(8) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子畏於匡章「後死者」、夫子自謂也。

「死」字對「沒」字。」また、「後死者」是對上文「文王」言之。如曰「未亡人」之類、此孔子自謂也。』『論語集解』の何晏の注には「孔安國曰、文王既没、故孔子自謂後死也。言天將喪此文者、本不當使我知之、今使我知、未欲喪也。」「馬融曰、如予何者、猶言奈我何也。天之未喪此文也、則我當傳之、匡人欲奈我何、言其不能違天而害己也。」とある。

- (9) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子畏於匡章「與「天生德於予」意思一般。斯文既在孔子、孔子便做著天在。孔子此語、亦是被匡人圍得緊後、方說出來。又問「孔子萬一不能免匡人之難時、如何。」曰「孔子自見見得了。」また、「子畏於匡」一節、看來夫子平日不曾如此說、往往多謙抑、與此不同。」先生笑云「此却是真箇事急了、不覺說將出來。」

- (10) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子畏於匡章「敬之問「明道」「舍我其誰」、是有所受命之辭。「匡人其如予何」、是聖人自做著天裏。孟子是論世之盛衰、己之去就、故聽之於天。孔子言道之盛衰、自應以己任之。」未審此說如何。」曰「不消如此看。明道這說話、固是說未盡。如孔子云「天之將喪斯文」、「天之未喪斯文」、看此語也只看天如何。只是要緊不在此處、要緊是看聖賢所以出處大節。」『論語集註』泰伯「曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人與。君子人也。」朱子注「其才可以輔幼君、攝國政、其節至於死生之際而不可奪、可謂君子矣。與、疑辭。也、決辭。設為問答、所以深著其必然也。程子曰「節操如是、可謂君子矣。」

- (11) 『朱子語類』論語十八・子罕篇上・子畏於匡章「問「程子云「夫子免於匡人之圍、亦苟脫也。」此言何謂。」曰「謂當時或為匡人所殺、亦無十成。」某云「夫子自言「匡人其如予何」、程子謂「知其必不能違天害己」、何故却復有此說。」曰「理固如是、事則不可知。」